

## 辻正二所長がご定年を迎えられました。

### ハイライト

- ・辻所長がご定年を迎えられました。

辻正二所長がご定年を迎えられました。 1

辻所長のこれまでの歩み 2

辻所長へ贈る言葉 2

活動レポート 3

- ・青山准教授『分析哲学講義』(筑摩書房)刊行
- ・時間学特別セミナー「物語あるいは人生の時間」
- 時間学特別セミナー「時間意識の国際比較」

所長室より 4

- ・持続という時間

時間学ミニ辞典 4

- ・Lag Adaptation

2006 年 4 月に時間学研究所長にご着任し、所を牽引し支えて下さった辻正二先生がこの 2012 年 3 月をもってご定年を迎えられることになりました。辻先生のリーダーシップのもと進めてきた時間学研究所の活動は学内外で高い評価を得て所の常設化が決まり、更には「時間学」の確立とその研究成果の普及啓発の功績が讃えられ、平成 23 年度文部科学大臣表彰「科学技術賞(理解増進部門)」を受賞するに至っております。所員一同、時間学研究所、そして時間学の父である辻先生に心より感謝と賛辞の気持ちを表したいと思っております。

### (最終講義)

平成 24 年 3 月 3 日土曜日、人文学部の主催で辻先生の最終講義が行われました。

「マートン研究から時間の社会学研究へ」と題してご自身の研究の集大成を、会場を埋め尽くす多数の来場者に向けて、熱く講演されました。続いて、会場を学生食堂きららに移しての謝恩会では、小さいお子様連れの教え子らが遠路からも駆けつけ、辻先生を囲んで記念撮影をするなど、賑やかに思い出話の華が咲いていました。



### (辻先生をお送りする会)

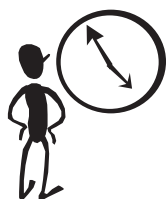
平成 24 年 3 月 23 日金曜日、時間学研究所主催で辻先生をお送りする会を開催しました。

会場の山口グランドホテルには学内関係者はもとより日本時間学会のメンバーも駆けつけ、先生の功績を称えました。また、当日は辻先生の 64 歳のお誕生日ということもあり、シェフ姿の宮崎先生が特大ケーキをワゴンで運んで登場し会場を沸かせ、明石研の荒木さんの伴奏で HAPPY BIRTHDAY を合唱しました。



時間学研究所ニュースレター第 6 号をお届けします。今回はご定年を迎えられる辻正二所長の特集です

《時間学研究所》  
〒753-8511  
山口市吉田 1677-1  
TEL/FAX083-933-5848  
jikann@yamaguchi-u.ac.jp  
www.rits.yamaguchi-u.ac.jp



## ～辻正二所長これまでのあゆみ～

- ◇1971年 大学卒業。卒論のテーマ：「逸脱行動論序説—マートン理論と諸批判を中心として」（1971年1月）
- ◇1971～1978年 大学院時代。修士論文のテーマ：「マートン中範囲理論の論理構造」（1974年1月）。1976～1980年にかけて『社会学研究年報』に「初期マートン社会学の形成」など3本の論文を発表。
- ◇1978～1981年 鹿児島女子短期大学に着任。逸脱行動論、特にベッカーの『アウトサイダーズ』論やその応用に注意を注ぐ。傍らマートン研究も継続。
- ◇1981～1991年 宮崎大学へ転任。宮崎大学唯一の社会学者として地域社会の要請に対応。理論だけでなく調査研究にも従事。
- ◇1991～1996年 山口大学教養部へ転任。「一般教育」の社会学を担当。理論研究を主体に研究を行う。
- ◇1996～1999年 山口大学経済学部へ異動。「地域福祉社会学」と「社会病理学」を担当。研究もそれに対応して高齢者研究に重点を置く。同時に、高齢者ラベリング論とマートン研究のまとめの作業を開始。
- ◇1999～2012年 人文学部社会情報論コース（社会心理学担当）へ異動。九廣先生の主査により久留米大学から博士(文学)を授与（2001年3月）。



## 辻 正二

1948年3月23日生  
専門 時間社会学

- ◇2006～2012年 時間学研究所長に着任。文理融合を目指す時間学の拠点化と研究の推進を目指す。旗振り役と同時に時間学の構想などを所員や関係者とともに研究、研究成果を論文や講演等で公表する。時間学のテキスト（『時間学概論』（恒星社厚生閣））を監修し、出版（2008年4月）。また、日本時間学会の設立にも深く関わり、同学会設立準備委員会の代表であるとともに、2009年より同学会初代会長を務める。こういった時間学の構築と発展への取り組みが評価され、辻所長を代表として平成23年度文部科学大臣表彰「科学技術賞（理解増進部門）」を受賞（2011年4月）。

## ～辻所長へ贈る言葉～



藤沢健太

辻先生が在職中の出来事：研究セミナー活発化、客員教授制度、国際シンポジウム、廣中先生が名誉所長に就任、『時間学研究』創刊、日本時間学会設立、イブニングセミナー・公開講座開始、所員は6名に増員、文部科学大臣表彰を受賞…辻先生はまさに時間学の発展に尽くされました。



青山拓央

辻先生の所長着任とともに私も大学に赴任したため、先生には多くのことを一から教えて頂きました。本当にありがとうございました。ご退官後もぜひシンポジウムなどにお越し下さり、アドバイスを頂けると幸いです。



明石真

分野も価値観も違う研究者同士が団結できたのは先生のお人柄があったからこそでした。また先生のお話の端々から研究者の心意気を垣間見て励まされることもありました。今後とも研究所の一員として宜しく願い致します。



宮崎真

辻先生の社会学者としての厳しく鋭い視点の根底には個人個人への優しさが溢れておりました。そんな辻先生の笑顔に日々癒されると同時に、その背中に時間学マインドを見ました。これからもまだまだご指導・ご鞭撻のほどお願い致します。



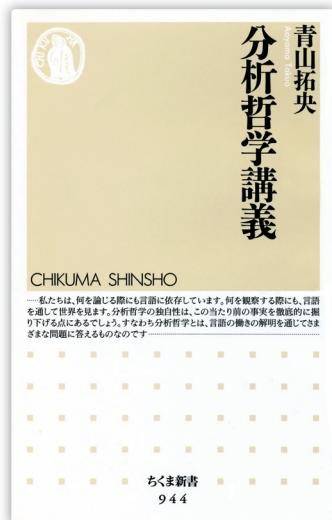
平田博子

平成20年から先生の下で働かせて頂いて早や四年、研究所の存続危機を乗り越え、今では総勢18名の大所帯となりました。先生はみんなの良き父親的存在で、どんな時も矢面に立ってメンバーを守って下さいました。また、時間学に対する熱い想い、人付き合いの妙、その他人生に必要なたくさんのお話を学ばせて頂き心から感謝しています。本当にありがとうございました。

## 青山拓央准教授が新著刊行 『分析哲学講義』（ちくま新書）

「分析哲学」と呼ばれる分野の、講義形式の入門書です。全9章からなり、時間については最終章「時間と自由」にて論じています。本書ではその他、「言葉はなぜ意味をもつのか」「自然科学における自然とは何か」といった問題を扱っています。

新書: 270 ページ  
出版社: 筑摩書房  
発売日: 2012/2/6  
価格: 882 円



## 時間学特別セミナー

### 『時間意識の国際比較』

中国の山東大学から馬広海先生、そして千葉大学から一川誠先生をお招きして、下記のプログラムで時間学特別セミナーを開催いたしました。

日時: 2012年2月28日(火) 13:30~17:30

場所: 人文学部小講義室

- ① 馬 広海 (山東大学哲学・社会発展学院副院長)  
「中国人の時間」
- ② 一川 誠 (千葉大学文学部准教授)  
「人間の時間的特性と適応問題: 実験心理学からの検討」

馬先生は中国で常用されている暦の解説を軸に中国の方々の自然観とそれに基づく生活習慣について分かりやすく丁寧に語解説下さいました。テレビでもお馴染みの一川先生は、不思議な錯覚現象のデモをしながら、ヒトの時間感覚や注意の作用特性やメカニズムについて進化的視点も交えて論じられました。

## 時間学セミナー

### 『物語あるいは人生の時間』

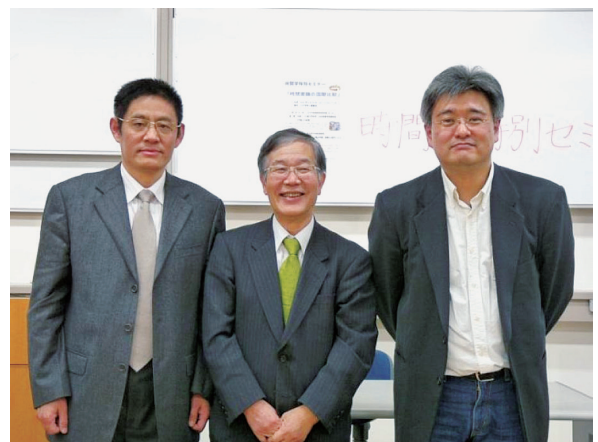
下記のプログラムで、山口大学哲学研究会との共催により第3グループ・セミナーを開催いたしました。

日時: 2012年2月23日(木) 15時~17時

場所: 人文学部小講義室

- ① 森野 正弘 (東アジア研究科)  
「進行と遡行—『源氏物語』における時間の表象—」
- ② 青山 拓央 (時間学研究所)  
「時間の分岐問題について—意思決定と可能性—」
- ③ 田中 均 (人文学部)  
「幽霊と演劇—《ハムレット》における「関節の外れた時間」」

森野先生は『源氏物語』における物語の時間的遡行について、青山先生は意思決定時点の定位不可能性について、田中先生は演劇「ハムレット」と時間的反復との関係について講演されました。



馬先生

一川先生



持続という概念を哲学的に考究したのはベルグソンである。彼は、生の哲学者として時間意識の究明に心血を注ぎ、純粹持続という概念で「自由」や「同時性」などといった時間問題を解き明かした。彼の持続の考察は、哲学的に掘り下げた研究であるが、そこまで掘り下げずに、社会的局面の持続のレベルで考えても、持続とは、時間学的には極めて重要な概念であるように思う。人は幸福な境遇をできるだけ長く持続しようとし、逆に不幸な境遇の持続をできるだけ短くしようとしてきた。だから、大概の場合、持続問題は後者において考えられてきた。

この持続問題で、いまわが国でなによりも大きな課題の一つは、昨年の大震災の被災者の人たちの被災の状況の持続を断ち切り、被災前の状態に戻すかという課題であろう。昨年の時点で、被災者の方々から聞いた「時が止まった」という発言は、時間を研究しているものとしては、衝撃的であった。この発言が震災前の持続を喪失したことを意味すると解するならば、新たな時間を動かすことから始めないといけないのであろう。

こうした持続概念のなかで、社会学者の R.K. マート

ンが提起した「社会的に期待された持続」という概念は、現在のわれわれが抱える持続問題に一步踏み込むことを可能にする概念であるように思う。彼は、この「社会的に期待された持続」の種類には、「社会的に規制された持続」、「集合的に期待された持続」、「パターン化された一時的な期待」の3種類があると言った。被災者の方々が抱える課題は、住む家屋、高台移転を含めた居住地の決定、仕事の確保、住み慣れた故郷や自己のアイデンティティ形成に必要な基盤の確保などの問題を速やかに解決して、将来への希望の持てる状態にあることである。ただ、この中には福島原発の事故のように健康被害をもたらす災害も含まれるので、非常に深刻なケースも含まれる。

ベルグソンが「生きる視点」から持続問題を扱ったが、いま私たち日本社会は、東日本大震災、それ以外にグローバル化、少子・高齢化、情報化などで生活環境が激変しつつある。その意味で、「生きる」という視点からの持続という時間問題を突きつけられているのである。

(辻 正二 山口大学時間学研究所長)



## 時間学ミニ辞典 【Lag Adaptation】

五感という言葉にも表れているように、我々は視覚、聴覚、触覚、味覚、臭覚といった多数の感覚を用いて外界での出来事を認識しています。一つの対象を認識するにあたって通常は単一の感覚のみに頼らず、複数の感覚を動員します。映画やテレビ番組はまさにその良い例です。それらは、映像と音声を用いて表現され、それぞれ別の機器を用いて呈示されているわけですが、我々はそれらを同一の出来事/流れとして認識します。我々が多数の感覚をいかに結び付け、統合された認識を形成しているのか？この問題は、心理学、神経科学の大きな課題のテーマとなっております。

そういった多感覚統合の問題は時間知覚の研究にも問題を投げかけます。夏の風物詩の花火や雷でも実感するように、光は音よりも早く空間を伝達します。つまり、距離をもった対象から発せられる視覚刺激と聴覚刺激は、それが同一の対象に由来するにも関わらず、異なったタイミングで我々観測者のもとに届きます。こういった物理的な伝達時差に加えて、我々の身体内でも伝達時差が生じます。脳の電気活動を計ってみると、視覚刺激よりも聴覚刺激に対して早く誘発電位が生じることが知られています。つまり、我々の神経系では聴覚信号の方が視覚信号よりも速く伝達されています(生理学的時差)。

こういった視覚-聴覚間の伝達時差に対して、我々の脳が適応する能力があることがNTT コミュニケーション科学基礎研究所とカリフォルニア工科大学による研究グループによって報告されました(Fujisaki et al. 2004, *Nat Neurosci*)。それがLag adaptation, 時差馴応です。一定の時差をもった音-光刺激の組を被験者に繰り返し提示すると、被験者の知覚のなかでは、それらの刺激の時差が短縮して感じられるようになりました。つまり頻繁に経験した視-聴覚の時間差を同時とするような方向に被験者の知覚が変化しました。この作用は視-聴覚間の物理学的/生理学的時差を埋め合わせ、同一の対象に由来する視-聴覚刺激を結びつけること関与しているものと考えられました。その2年後、この時差馴応は、左右の手に与えた触覚刺激の時間順序判断では生じないことも確認されました(Miyazaki et al. 2006, *Nat Neurosci* \* ここでは、さらに時差馴応とは正反対の知覚判断の変化が生じたのですが、その意味するところはまた別の機会に)。対象との直接接触によって生じる触覚どうしでは、そもそも物理学的時差もなく、生理学的時差も僅かです。つまり、いたずらに時差馴応が作用しても誤った知覚判断をもたらすだけです。ここで時差馴応が観測されなかったことは、むしろ時差馴応が機能的意義を有することを支持する結果となりました。(時間学研究所 宮崎 真)